私の戦争体験

佐賀県鳥栖市　　松原　アイ子（旧姓：松本）

私の青春は戦時中の真只中でした。着ている洋服は和服の仕立直し。母の着物を幾夜か、かかって作り直した。モンペ上下、また、ほんのりの化粧は店の人に三拝九拝して手に入れる。ハピリオの粉化粧。あまり目立ないように塗った口紅も、その品質の善し悪しを選ぶことさえむつかしかったものです。

私の勤める会社は大日本映画配給株式会社九州支社で、映画のフィルムをこの会社を通じて九州全土の映画館に貸し出したり、慰問用の８ミリカメラを持って基地、工場とかに映画会を開きに出かけたり致しました。ある時、映画会の最中にサイレンがなり、私達映写班の者は、あわてて帰った事もあります。その時内緒で受けた甘い菓子など大切に胸の中に隠して持ち帰ったものです。

会社の制服もいつの間にやら、国防色の上下となり、昼食後の時間には竹槍訓練と防火訓練と、それなりに楽しく訓練されていました。戦争の怖さも知らずに。そんな折にお誘いを受けました。平和産業に勤める女子はすべて徴用され、軍需工場に行かねばならなくなるから「今の内に警防団へ入って非常の時特別看護員として働く」、資格としては元気な体と独身の女性であること。それで私は考えました。家にあってもほの暗い灯の下では読書もままならず、また読みたい本もあまり自由に入手できず、話をしてみたい若い男子は兵隊さんではね、それで特別看護員でもなればと、そんな思いもあり、面接を受けたところ、許可されて同じ町内にある千代町警防団に配置されました。

黒い制帽には星が１つ、胸章にも金線１本に星１つ、一緒に採用された女子は確かに４名ぐらいだと思います。肩に黒い布地の雑嚢、赤の赤十字マーク、中身は応急薬品、包帯、三角巾、チンク油等々、何の知識もない私達は大急ぎで三角巾の使い方、包帯の巻き方を幾通りと習いました。ある時九大病院前に開業しておられる医師先生の所に伺いました。「アキレスの手術」でした。手術室に入れてもらい、ピカピカと冷たい光りを持っているメスが術者の足にぐさり、流れる血、ガーゼでふきとられ、真赤なガーゼと綿花に、私達の顔面はガラスの様な床に落ちて行く、手際よく医師の手伝をされるナースの姿を見てるだけでした。終わって手術室を出る私達の顔は青ざめて、血を始めて見る恐さを始めて知りました。その内にも爆音によって知るＢ２９、ロッキード、グラマンと訓練されました。

何事もない朝、私は会社の方へ出勤します。肩には例の雑嚢とわずかばかりの私物に化粧品に帽子を持って、会社の係長から今日はこちらかなと言われたものです。初めは珍らしく見られた私の姿もサイレンと一緒に消える私に手を振ります。同僚は退避するからです。空襲を知らせるサイレンは昼間も人をおびえさせるようになりました。Ｂ２９の白く冷たく光る機姿を見ることもしばしばありました。発令と同時に出動する詰所には、何らかの理由で兵役を科せ

られない、おじさん達でした。でもゲートルを巻き国防服をきちんと着た人を見るとそれなりに頼もしく見えたものです。若い人と言えば警察本署からのお巡りさんだけでした。

あの６月の博多空襲のサイレンは嫌に胸にひびき、同時に始まった空爆にただただ暗い夜道を詰所に向い走りました。千代町警防団は東公園の入口に当たる所に有り、公園の入口に立つ常夜燈の横にあり、吾が母校も東公園の中にありました。公園の中には幾張りかのテントが用意されて、そこには本当の看護婦さんと医師がいました。時が過ぎるにつれ避難して来る人達、赤い火が空まであがり、道行く人達をおどかしています。私の持場では避難して来る人の名前、性別、住所、血液型を書き、大きい荷札を衿または手首に巻きました。骨折の人には副木をして包帯を巻き、火傷の人にはチンク油を塗り、出血の人には止血処置をして時間を書き入れました。泣き叫ぶ人をなだめ、叱り、本当の医師の所へ誘導して、軽い怪我の人達は避難所に連れてということで何時間過ぎたのか。幾百人の名前を書き、また避難所に誘導したのか、消えた電気の替わりに燃える家のくすぶりでただただ働きました。少し夜が白みかかった頃に休息があり、無事な詰所の２階に行きました。そこで出た握り飯を何個食べたか覚えていませんが、一緒に出た梅干しと沢庵の色が今も頭の中に鮮明に残っています。気にかかる吾家の事ですが、情報によればそのあたりの町は無事とのこと、他の人には言えない安心を覚えました。明るくなって目にする町の様子はまるで地獄の様子、たれ下る電線、まだくすぶる家に恐れと怒りに震えましたが、私達隊員はこれから起きる地獄はまだ想像がつきませんでした。一滴の涙さえ出ない自分が不思議でした。

さて、これから再び経験することのない仕事が待っていたのです。町の様子も説明されましたが、何故そんな事になったかと、悲しみよりいぶかしく感じる私だったように思います。隊員総出動で焼跡に焼死体の収容です。訓練を受けたばかりのタンカを肩に、警察の指示によって出動です。死体を集める場所を聞き、また大きい荷札を手に出かけます。初めて見る焼死体、とてもこわくて恐ろしくて手が出ませんけど、あの時は少し気持ちが皆んなどうかなっていたように思います。タンカの焼死体は小学校運動場に並べました。かぶせたむしろが風に吹かれて姿もあらわに見え、とても口にできるような悲惨さではなく、筆で表わせる様子ではありません。色々な流言飛語の飛び交う毎日でした。まどわされる事も度々です。

でもやはりサイレンが唸ると、止める母を振り切って出動したものです。また祖母が長く朝鮮に住んで言葉が解るので、いつの間にやらこっそり訪れる朝鮮から徴兵された兵隊さんがいました。残った飯を握り、大急ぎで渡す祖母にその人達は何度も頭を下げて帰りました。後姿がとても悲しかった事を覚えています。家が残っている吾家は、復員の兵隊さんの案内板みたいな物です。家族の行先の解る人には知らせてやり、それを喜んで行かれる人を見る時は嬉しく、不明の人には気の毒な思いも致しました。

さて終戦と同時に詰所の方もいつの間にか行かなくなり、１ヶ年を過ぎた頃、同封の感謝状が送られました。金一封はどれだけかよく覚えていませんが、感謝状は捨てがたく今日に至りました。

今の私達の平和な幸せに比べることは出来ませんけど、何かに向って突走っていた私達の青春は何でしょうか。命をかけて往かれた人達はあの世で何と見ておられるでしょうか。何かの証しになればと思い同封致しました。

合掌

感謝狀

松本愛子殿

多年警防團員トシテ克ク分團ノ發展ニ盡瘁セラレ其功績顯著ナリ

茲ニ警防團ヲ辞セラルニ當リ聊カ記念トシテ金一封ヲ贈呈シ感謝ノ意ヲ表ス

昭和二十一年十月二十日

福岡市警防團

千代分團